

卵の側に立つ

令和5年12月22日 浅賀

おはようございます。

令和5年度2学期が終わります。振り返れば、2学期は近年にない酷暑の日々から始業し、いなほ祭、体育祭はアフターコロナの本格始動、つい先週は2年次の修学旅行がありました。いずれも思い起こすたびに胸が熱くなるような思い出を作ることができたことでしょう。

3年次にとっては行事のみならず進路開拓で大きな前進を遂げたことと思います。すでに進路先の決定した諸君にお祝いを申し上げつつ、残す高校生活を大切にしよう願います。本校ではありえないことですが、進路決定とともに気が緩んで、成績を下げ生活習慣を崩すようでは、卒業を祝う思いが失せます。厳しく自己を律してください。

さらに一般受験に向けクリスマスも正月も返上して努力を続ける諸君、模試の結果に一喜一憂していませんか？クラスの雰囲気は緩んでいませんか？諸君の受験勉強を見守り、励まし、応援してくれますか？気力を奮い起こし、誘惑や迷いを絶ち、受験勉強に邁進することは、結果のみならず精神面にも大きな成長をもたらします。諸君の大願成就を、教職員一同祈っています。

さて、作家の村上春樹さんは14年前、イスラエルの文学賞「エルサレム賞」を受賞しました。それはイスラエルがパレスチナを3週間空爆した翌月のことでした。その受賞スピーチ村上春樹著「壁と卵」—エルサレム賞・受賞のあいさつ（『雑文集』所収）新潮社刊は、次のような前置きで始まります。

※著作権に関して、HP転載のお許しがいただけませんでした。
終業式における講話での引用については、お許しをいただき、前掲書から引用しました。

村上春樹著「壁と卵」—エルサレム賞・受賞のあいさつ（『雑文集』所収）新潮社刊

引用中、千人を超える人々が命を落としたとありますが、今起きているイスラエル軍の攻撃による死者数はどうでしょう？今朝の報道で、2万人を超えているのです。14年前とは比較にならない多さ。そのほとんどが女性や子供といった非戦闘員、今この瞬間にも幼い子供たちの命が脅かされているのに、私はそれを止めることをせず、3食ご飯を食べて、きれいな水を飲んで、暖かい布団で、ミサイルや銃弾が飛んでくることにおびえることなくぐっすり眠って、こうして諸君に訓辞を垂れています。一方村上春樹さんは渦中に飛び込み、当事者に語りかける、その姿勢に頭が下がります。そのスピーチは本題に入ります。

※著作権に関して、HP掲載のお許しがいただけませんでした。
終業式における講話での引用については、お許しをいただき前掲書から引用しました。

「もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。」

村上春樹著「壁と卵」—エルサレム賞・受賞のあいさつ（『雑文集』所収）新潮社刊

いかがですか。どんな印象でしょうか。初見で理解できるほど簡単ではありません。きっと国語の教科書にある題材文のように、何度も読み返すことで理解が深まり、諸君の教養を深めるはずです。このスピーチは本校図書館にもあります。ぜひ深めてください。

私はパレスチナの報道に触れて、このスピーチを思い出し、諸君と共有したいと思い立ちました。ウクライナも解決しないのに次はパレスチナ、しかもイスラエルの強硬な姿勢に対して、いずれの国も歯切れ悪く、メディアも奥歯にものが挟まった物言い、国連の決議も歯がゆいばかり。渦中に飛び込んだ村上春樹さんの姿勢とはあまりにも対照的です。

地震や噴火の予知なら、科学技術の成果によっていつかできるようになる、ウイルス感染もいずれ科学技術が勝つ、でも戦争はなくならない、これらの見込みはきっと正しいでしょう。科学技術なら直線的に進化発展しますが、人間の理性、倫理、情動はそういうわけにはいかない。振り子のように揺れ動き、後戻りし、とも

するとかつての過ちを繰り返す羽目になりかねません。

ナチズムは、当時最も民主的と言われたワイマール憲法のもとで興りました。憲法が悪かったとは思いません。国民が不平不満を募らせていた。それを指導者たるヒトラーが巧妙に絡め取ったのだと思います。指導者が悪いのか、不平不満を募らせた国民が悪いのか、不平不満を募らせる原因を作ったパリ講和会議がいけないのか。それは諸君の思考、判断にゆだねますが、その結果500万とも600万人ともいわれるユダヤ人虐殺を招いたこと、システムの独り立ちをさせてしまった恐ろしい結末ですが、似たようなムーブメントはわが国でも起こったことを、決して忘れてはなりません。

ここで改めて諸君と共有したいのは、「もし我々に勝ち目のようなものがあるとしたら、それは我々が自らの、そしてお互いの魂のかけがえのなさを信じ、その温かみを寄せ合わせることから生まれてくるものしかありません」です。この「その温かみを寄せ合わせることから生まれてくるもの」とは、はたして何でしょうか？ 私は恥ずかしながら齢60にして見当が付きません。この「生まれてくるもの」とは何か、私は諸君とともに思索していきたい。そしていつか、この「もの」に思い至ったとき、私は諸君とともに新たな境地に至ることができるような気がします。

今一つ、伊奈学園の校長はシステムの側、校長のバックには教育委員会、国家権力までであるということ。もしもこのことを諸君に指摘されたら、私はこう言い返します。すなわち「諸君だって、いずれはシステムの側に立つ。校長など遥かに凌ぐ出世をシステムの側とする者もいる」。肝心なのはシステム側か否かではなく、システムの側にありながら、システムの独り立ちをいかに留めるかにあるのです。

わが敬愛する弁護士、中坊公平は、事件の被害者に接するたび「なぜ強いものと弱いものがあるのか。そして弱いものはなぜ、強いものに生存すらも脅かされなくてはいけないのか。NHK「住専」プロジェクト『野驥の指揮官・中坊公平』NHK出版1997」と慨嘆したそうです。そしてヒ素ミルク中毒事件、豊田商事事件、豊島産業廃棄物問題などをおし一貫して、被害者救済の立場で活躍します。これはシステムの側にある人が、温かみを寄せ合わせ、何かを生み出したのだと感じられます。私は足元にも及びませんが、信念の拠り所にしてきました。

結びに、もう一つ信念の拠り所にしてきた短歌を紹介します。「**利のやつこ 位のやつこ 多き世に 我は我身のあるじなりけり** 佐佐木信綱」。やつことは奴隷のこと、自らの儲けばかりに目がくらんでしまう**利のやつこ**、地位や名声を求めて汲々としている**位のやつこ**。富や名声は、誠実に努めていればあとからついてくるものなのに、いつの間にか主客逆転して、儲け話や出世欲に翻弄される人は、世間に多いのかもしれない。

諸君が近い将来システムの側になっても、**利のやつこ**、**位のやつこ**に成り下がることなく、果たして自分は、**我身の主**たるか否か、絶えず写し鏡のように自己を見つめ、ダモクレスの剣のように自らに突きつけて、往く令和5年を振り返り、来る令和6年を展望してくれること、そして3学期始業式にはだれ一人欠けることなく、元気に集うことを楽しみにします。